

✈️ 海外生活 だより

北京事務所

流行音楽にみる現代中国事情

北京事務所所長補佐 古川 健(京都府派遣)

はじめに

“歌は世につれ世は歌につれ”といわれるように、歌は世情を反映し、時には世の中の情勢も歌の流行によって影響されます。私は、1994年秋に国立京都国際会館で平安建都1200年記念事業の一環として開催された「アジアミュージックフェスティバル」に出演した歌手、崔健と艾敬の歌をステージ間近で聴き、これが今時の中国の音楽かと衝撃を受けたことを鮮明に覚えています。崔健は北京生まれの中国ロック界の第一人者で、天安門の学生たちに愛唱された『一無所有』(俺には何もない)の作者です。また、瀋陽生まれの艾敬は香港返還前に“97年早く来て”と歌った『我的1997』(私の1997)で有名なシンガーソングライターです。

以来、私は中国の文化に興味をもち、中華圏の歌を好んで聴き、中国の映画やドラマも好んで見てきましたが、中国語がわかれば歌の情感をもっと理解できるのではないかと、字幕なしでも映画やドラマを楽しめたら中国をもっと理解できるのではないかと思ったのが、中国語学習を始めようと考えた動機の一つでもあります。

北京で開催される演唱會

北京では中華圏の多くの歌手の演唱會(コンサート)が開催されます。休日に演唱會で好きな歌手の歌を聴くのは余暇の楽しみの一つです。

演唱會は北京オリンピックの会場にもなった五棵松体育館や首都体育館、工人体育館など、1万から2万人近く収容できる大規模体育館が主な会場となります。歌神といわれる香港の張学友や、天后といわれる王菲(北京生まれで香港でデビュー)

一) といった大スターになると、演唱會は中国各地で巡回開催されますが、北京でも五棵松体育館などで数日間にわたって行われます。



入場券と一緒に配布されるカード

演唱會には中華圏の各地からファンが駆けつけ、歌手の愛称やファンクラブの所在地が書かれた横断幕や電光ボードを用意し、蛍光スティックを手に熱い声援をおくります。これらは中国ではスターの応援に欠かせないアイテムです。中国大陸の都市名だけでなく、香港、台湾、シンガポール、マレーシア、韓国や時には欧米諸国の名前が書かれた電光ボードも見られます。客席の電光ボードを見ると、その歌手がいかに広い地域で人気があるかをうかがい知ることができます。

中国の演唱會では、知っている歌が歌われると一緒に口ずさむ人がとても多く、舞台脇の大型モニターに中国語の歌詞が表示され、会場内で大合唱が始まります。

演唱會は通常夜7時30分開演ですが、会場付近の道路は大変込み合うので、地下鉄で会場に向かえば、駅の出口付近からダフ屋が何人も待ち構えていて声をかけてきます。振り切って会場に進む途中、歩道では蛍光スティックや双眼鏡が売られています。会場入口でチケット確認を受けた後、空港と同じように厳重な荷



演唱會会場付近の露店の様子

物検査が行われます。

演唱会が終わり外に出ると、いつの間に用意されたのか、会場で撮影された出演歌手の写真パネルやTシャツなどが地面に並べて売られています。地べたにじかに板や布を広げて商品を並べて売る露店は北京の街の各所で見られ、摆地摊（バイディータン）と呼ばれていますが、演唱會でも名物となっています。

街に流れる流行歌

北京では、北京音楽広播をはじめとするFMラジオ局やテレビ放送のチャンネルが充実しており、街のレストラン、市場、タクシー、地下鉄ホームや車両の中のテレビモニターでも流行歌がよく流



富力広場での張杰のライブは長蛇の列

れています。市内の富力広場などの大型商業施設では集客・販売促進活動としてミニライブなどのイベントもよく開催されます。

中国の流行音楽にはポップス、ロック、民歌などがありますが、ポップスに関していえば、人気スターの多くは台湾や香港の歌手です。特に今、若者を中心に人気を誇る周杰倫や蔡依林、F4に続き台湾ドラマに出演して人気を得た飛輪海など台湾ポップスが席捲しています。マレーシア出身の梁静茹やシンガポール出身の孫燕姿など華人歌手も台湾を発信拠点として人気を中華圏全域に広げています。

一方、大陸出身では、李宇春や張靚穎、張杰など、全国視聴率No.1の人気番組となった湖南衛星テレビ局のオーディション番組「超級女声」や「快樂男声」で優勝もしくは上位入賞した若手歌手が活躍しています。「超級女声」の全国的な大ヒットは社会現象になり、各地の放送局が競って同種の番組を放送するようになりました。湖南衛星テレビ局はこうした番組企画の成功で、国営放送CCTVを除く全国地方局の視聴率No.1を誇っています。

北京の街角で最近よく流れている曲に、台湾の実力派歌手、黄小琥が歌う『没那么简单』（そん

なに簡単じゃない）という歌があります。中華ポップスはラブソングが多いのですが、この歌は単純なラブソングではありません。歌唱力と曲の良さはもちろ



黄小琥のライブで蛍光スティックを振る若者

んですが、経済発展を続ける現代中国で様々なストレスを抱えている若者を中心とする社会心理がこの歌を支持し、大ヒットにつながっているのではないかと思います。

歌を通じた交流

中国の若者に休日の余暇をどのように過ごしたいかと尋ねると、友だちと一緒に食事をしたり、歌を歌いに行きたいという答えが多くかえってきます。特に友だちの誕生日や何かの記念日にはカラオケに行くことを楽しみにしている若者が多いようです。カラオケはもともと日本で生まれた文化ですが、台湾での流行を経て大陸にも広がり、中国人の生活にすっかり溶け込んでいます。

中国では「カラOK」と表記されますが、近年、都心部で立派な設備を備えた量販式カラオケ店が増え、「KTV」と呼ばれています。最近ではKTVに行って歌を歌うことを「K歌」といいます。

私も休日には歌好きの中国人の仲間たちと一緒に歌を歌いに行ったり、時には自宅に招かれて食事を御馳走になることもあります。

おわりに

昨年の上海万博の「ジャパンウィーク」では、日本の歌手が出演するコンサートや日本のポップカルチャーの紹介が公式行事として行われ、日本の文化の魅力を世界に発信するイベントが繰り広げられて好評を博しました。

音楽を聴いて感動する気持ちに国境はありません。これからも素晴らしい文化を見聞きする機会がさらに増え、生活に身近な文化を通じた世界の交流がさらに活発になればいいなと思っています。